



梠

—After Dark in the Playing Fields—



もう更<sup>ふ</sup>けていた。晴れた夜だった。

私はシープス橋から、ほど遠からぬところで足をとどめ、ただ堰水<sup>せきみず</sup>の音に破られている静寂を、思い耽<sup>た</sup>っていた。その時、ちょうど私の真上で、ひと声高く、ふるえるように、ホーホーと鳴く声でしたので、飛びあがった。いつもこいつで、胆をつぶされるのだ。だが、私は、梟には好意をもっていた。いま鳴いたやつは、いかにも身近かだった。私は見まわした。

ははあ、いたいた。十二フィートばかり上の枝に、むっくりとまっていた。

私はステッキで、そいつを指しながら言った。『鳴いたのは、お前だな？』

『それをお棄てなさい。』と、梶が言った。『それはただステッキと  
いうだけじゃない。ごめんですよ。ええ、無論、鳴いたのはわたしで  
さあ。そうでないとしたら、誰だっていうんです？』  
わたしの驚きは、これで一段落ついたものとしよう。私はステッキ  
をさげた。

『よろしい。』と、梶は言った。『鳴いたのが、どうなんですって？  
あなたが、真夏の夜、この通りにここへおいでだったら、なんにもあ  
りゃあしないでしょうがね？』

『まあ、ゆるしてくれ。』と、私は言った。『おれは、その言葉をよ  
くおぼえて置くよ。今晚お前に行くわしたのは、なによりだったと申  
しあげたいよ。すこし話をしたいものだね。』

『ええ。』と、梶は、ぶっきらぼうに言った。『だが、わたしは、今晚、  
こんな思いがけないことがあるとは、思いませんでした。今晚飯を

たべようとしたところです。まあ、あなたがあまり時間をとらなければね。—あ—あ！』

突然、梟は高く叫んで、翼<sup>はね</sup>を荒々しくバタつかせ、前方へかがみ、とまり木をしっかと掴んで、叫びつづけた。あきらかに、なにものかが、うしろから梟を、引っ張っているようだった。緊張はパツとゆるめられた。梟は前のめりにほとんどひっくり返えらんばかりに、すっかり翼を立てながら羽ばたきまわり、私には見えない或るものへ、反抗的な一撃を行った。

『ほう、お気の毒だった。』と、ちいさな、澄んだ声が、心配そうに言った。『わしは、たしかに、そつとやったんだよ。怪我はさせなかつたと思うがね。』

『怪我をさせないって？』と、梟は、にがにがしげに言った。『もちろんさせたよ。知ってるくせに。この裏切り小僧。翼<sup>はね</sup>は貴様のよりゆ

るみはしなかったがーおう、おれが、貴様をやっつけることができた  
らなあ！おれは、もう、貴様がおれを、びっくり狼狽させようとする  
ことを疑わないぞ。なぜ貴様は、おれを、一度二分間とじっとさせて  
おくことができないのかい。這いのぼって来ないでーよし、なんにし  
ても、貴様は、今度もやったんだ。おれは、さっそく本元ほんもとへ行つてやる。  
そしてー（と、言いかけたが、空中にはなにもいないことに気がついて）  
ーおや、どこへいきやがったんだ？おう、こいつしかたがないや！』  
『おいー！』と、私は言った。『こんな目に会うのは、これがはじめて  
じゃないようだね。はっきり言って、どうしたわけなんだね？』  
『ええ、そのわけはね。』と、梟は、こう答えながら、なお油断なく  
あたりを見まわして、『だが、それをお話するには、次の週が一番  
おわりまで待つてください。気まぐれものがやって来て、誰の尻っぼ  
の羽でも抜き出そうとするんですよ！わたしにもなにかひどい怪我を

させやがった。なんのためにするんか、わたしだって知りたいやね。あなたはどう思います。どこにその理由があるんです？』

私は、心にうかんだことを、口の中でつぶやいた。――『物さわがしい梟は、われわれの好奇心をそそるように、夜ごと鳴き怪しむのだ。』私は、この捕えらるべき要点を、ほとんど考えつかなかった。が、梟は鋭く言った。『なんですって？まあ、もう言わないでください。』

聞きましたよ。だから、わたしはそのしん底になにがあるか、お話ししましょう。よくわたしの言葉に気をつけるんですよ。――梟は、私のほうへ身をかがめ、まるいあたまを幾度かうなずかせながら、ささやいた。『傲然として！知らん顔でいるんですよ！それだけでいいんですよ！われわれのフェアリ・クイーンの仙女さん（この言葉には、はげしい軽蔑の調子がこもっていた）に、近かづいちゃいけない。おう、決して近かづいちゃ！あいつ等の同類に、好感はもてない。野や畑のすばらしい歌い手

に、ぼんやりする時こそ、注意すべき時ですよ。今が、そうじゃなかったですか？』

『うむ。』と、私はひどく腑に落ちない顔で、『おれはいろんなことを聞きたいよ。だが、ね。ここには鶇つぐみだとか夜鶯だとかいったものが、たくさんいるらしい話だ。お前はそのことを知ってるはずだが、どうだね？だとすれば、たぶん—無論おれは知らないんだが—たぶん、お前の歌い方は、そんな連中の踊にぴったりしないのじゃないかね？え？』

『いや、それはまっぴらでさあ。』と、梟は、反り返えって答えた。『わたし達仲間の歌い方は、踊に合うようなもんじゃない。なににだって合うようなもんじゃない。ええ、あなたがなにをお考えなさろうとね！』  
だんだん、怒りっぽい調子になって、『わたしから言えば、あいつらの吃逆しじくに合わせるにや、もって来いですよ。』—梟は、ちよつと言葉

を切り、ぐるりや上下を、用心深く見まわした。そして、またもつと高い声でつづけた。『あいつらーあのちいさな紳士淑女諸君の吃逆にね。もしそれがあいつ等のお気に召さなきやあ、わたしのお気にも召しませんよ。で（と、また怒りっぽい調子で）、もしあいつ等が、踊ったり、馬鹿をつづけたりすることに、わたしが文句をいわないと思ってるなら、大まちがいでさあ。わたしは、あいつ等に、そう言うてやりませなあ。』

これは軽率なことをいうと、私は心配したのだが、そこに起った事から見て、私の考えはまちがわなかった。梟がおしまいにも力強くうなづくやいなや、ちいさな細いものが上の枝から落ちて来た。なにか草の綱のようなひらひらしたものが、不幸な彼のからだのぐるりに投げかけられた。そして梟は、声高く反抗しながらも、フェロー池の方へ、空中を拉致されてしまった。ザンブリという水の音、ゴロゴロと鳴ら



す喉の音、冷酷な笑いの叫びを、私は、急いで追っかけながらも耳にした。

なにかが、私の頭上を飛び去った。そして、私が、すっかり波立っている池を、堤からさしのぞいた時、プンプン怒った、もじやもじや頭の鼻が、苦しげに堤へ這いあがって来た。それから私の足もとで、ブルツと身ぶるいし、翼をバタつかせ、しばらくシューシュー息を吹いた。やめろといっても、返事もしなかった。

それから、私をねめつけるように、やがて口を切った。―その不吉らしい押しつけた声音は、私を一二歩思わずあとすさりさせたほどだった。

『ど、ど』へ行きやがった？へん、お気の毒さまだ。あいつ等、おれを鴨だとまちがえやがったんだろう。おう、誰があいつ等に、のめのめたぶらかされてなるもんか。何マイル四方、どんなものだって、

めちやめちやに、引っ裂いてやれないってことが、あるもんか。』  
こう、夢中に怒り出して、梶は、まず手はじめに、大きなひと銜くわえの  
草を、ひき抜きはじめた。だが、あっ！草はその喉にささった。そし  
て息をつまらしたので、私は、血管を破ったのではないかとほんとう  
に心配した。だが、どうにか痙攣はおさまり、梶は、目をパチパチさ  
せながら、息もつかなかったが、どうにか怪我もなく、起きあがった。

梶は、なにか同情の言葉でもかけてもらいたい様子だった。だが、  
私はめったには、そんなことを言おうとしなかった。それは、梶の今  
の心持では、もっともいい言葉をかけてやったところで、新たな侮辱  
として解釈されそうだったからだだった。そこでわれわれは、ひどく気  
まずげに、ちよつとだまっただまま、顔を見かわして立っていた。そこ  
へ一つの気分転換が起った。はじめに亭ちんの時計が、かすかに鳴った。  
つづいて城の中庭から、ふかぶかとした時計の響きが聞えた。つづい

て、テプトン塔の時計の音が、カーフュー塔の時計の音を、その近か  
さのために打ち消すようにひびいた。

『ありやあなんです？』と、梶は、急に、しやがれ声で言った。

『真夜中だと思っよ。』私はこう言って、私の懐中時計を使った。

『真夜中？』梶は、たしかに驚いたようだった。『でも、わたしはひ  
どく濡れてるので、一ヤードだって飛べやしません。ねえ、わたしを  
つかんで、樹にのっけてください。いいや、あなたの脚をのぼって行  
きましょう。そうすれば、あなたは、それを二度しようとは言わない  
でしょう。さあ、早く！』

私は彼のいう通りにしてやった。

『どの樹なんだね？』

『どの樹って、わたしの樹でさあ！あすこにある！』

梶は、石牆のほうへ首を振った。

『ようし。あの焼渣やけかすの樹だね?』と、私はその方へ駆け出しながら言った。

『そんなばかげた名を、わたしが知るもんですか。とにかく、出入口みたいなものについている樹ですよ。早く! あいつ等が、またやつて来そうですからね。』

『あいつ等って誰だい? どういうわけだい?』私は、ずぶ濡れの梟を、ひつつかんで走りながら訊いた。丈高かな草の中を、梟をもって走り越えることは、つまずきそうで心配だった。

『あなたは、じき見るでしょうよ。』と、この自分勝手な鳥は言った。『あなたはわたしを、ちゃんと樹にのっけてくださりやあいいんです。それでオーライです。』

そして私は、なるほどオーライだと思った。というのは、梟が、翼をひろげて突嗟に幹を爬かきのぼり、あり難うとも言わないで、空洞うっろの

中に姿を消したからである。

私は嫌な気持で、あたりを見まわした。カーフュー塔の時計は、まだ、聖ダビテの曲と、それに伴うちいさな組鐘チャイムの音を、第三の最後の時間中、鳴らしつづけた。だがほかの鐘は、鳴るだけ鳴って音を収めていた。そして今や静寂が、あたりにみなぎった。ふたたび、絶え間なく変わる堰水の音のみが、静寂を破る―いや、静寂を強める、ただ一つのものであった。

なぜ梟が、あんなに懸命に、身を隠くそうとしたのか？それは、言うまでもなく、今、私に、こつした練習をさせたものだった。―なにか、誰か、やって来つつある。私には、ひろい原っぱを横切る時間のないことは、たしかだった。そこで私は、樹の暗い蔭に立って、身を隠くそうと努力しなければならなかった。―

すべてのことは、四五年前、夏なる前に起ったことだった。

私は時々、夜静かな時に、公園へは行ってゆく。だが、しんの丑満うしみつにならない前のことだ。そして私は、暗くなつてからの群衆を好まない。―たとえば、六月四日の花火の夜のような。

読者諸君に、そんなことはなかるうが、私は、そんなふしぎな顔を見る。そして、そんな顔をもつた人々は、諸君が待ちも受けもしないのに、しばしば諸君の間近かを、いかにも奇怪にスツと通り越し、諸君の顔を、じろじろ見つめる。それは彼等が誰かを―もし、彼等が、その人を見つけないければあり難いと思うらしい誰かを、さがし求めているようでもある。

『どこから、あいつ等は来たのだらう?』

どうも、或る者は水の底から、或る者は地の底から出て来たらしく、私には思えるのだ。彼等はそう見えるのだ。

だが、私は、彼等に気をとられたり、彼等に触れたりしないのが、

いちばんいいと確信するのだ。

そうだ。私にはたしかに、夜ふけて公園にいる人々よりも、日中の公園の人々のほうが好ましいのだ。